

聖書：創世記 25：12～26

説教題：エサウとヤコブ

日時：2023年12月10日（朝拝）

今日の箇所最初の 12～18 節は「イシュマエルの歴史」としてまとめられた部分です。ある注解書にはこのようなことが書いてありました。「この箇所を取り上げて十分な講解説教をしようとする人はいないでしょう。むしろ創世記のメッセージをたどる際の過渡的な情報として簡単に扱うことができます。」ですからここは単独ではなく、前か後ろと一緒に取り上げる方が良いということになります。皆さんならどっちにするでしょうか。イシュマエルはアブラハムの子ですから、アブラハムに関する最後の記事であった（前回の）25章1～11節とセットで読む方を選ぶでしょうか。そして19節からの部分はイサクについての話ですので、そこからを新しい区切りとすべきでしょうか。しかし創世記を読んで気づく一つの特徴は、神の救いの約束が継承されるプロセスを記すにあたって、先にそれを担わない側の人の系図等が簡単に記され、その後で言うならば本流の契約を担う側の人の話が来るということです。たとえばアダムの子カインとセツでは、カインの系図が先に簡単に記された後、神の契約を担うセツの系図が詳しく記されました。またノアの3人の息子セム、ハム、ヤフェテの内、神の契約を担うセムの歴史が一番後に記されました。またこの後のエサウとヤコブについても「エサウの歴史」が先に36章で簡単にまとめられた後、「ヤコブの歴史」が37章から詳しく描かれます。それと同じ順序が今日の箇所にもあると思われます。果たしてアブラハムに与えられた神の契約はアブラハムの死後、誰が担うのでしょうか。答えはイサクです。ですからそうではないイシュマエルの歴史が先に簡単に記され、19節以降で「イサクの歴史」がより詳しく描かれ始めます。そういう意味で、くつつけるとしたら前よりも後ろだと判断し、そのようにさせていただきました。

そのような観点からも、この部分は簡単に見たいと思います。この「イシュマエルの歴史」のポイントは何でしょうか。それはイシュマエルには12人の子が生まれたということです。これは後のイスラエル12部族と対応する数字と考えられます。つまりある意味での祝福が意図されています。これは神が前もって言っておられたことでした。17章20節：「イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた。必ず、わたしは彼を祝福し、子孫に富ませ、大いに増やす。彼は十二人の族長たちを生む。わたしは彼を大いなる国民とする」（21章13節、18節も参照）。つまり神の約束

はその通り成就した！というのが、ここの主要なメッセージであると考えられます。神の救いの約束を担うのはイサクです。イシュマエルではありません。しかしそんな彼にも神は約束を果たし、祝福を与えています。とするならましてやご自身の契約の民には！ということにもなります。

17 節にイシュマエルの一生は「百三十七年であった。彼は息絶えて死に、自分の民に加えられた」とあります。この「自分の民に加えられた」という言葉は、前回アブラハムの死を記す記事にも出て来た表現でした。そこである人は、これはイシュマエルの救いを意味するのではないかと言います。しかしこれまで見て来た通り、イシュマエルに霊的な性質は見られませんでした。また次の 18 節にその子孫は「すべての兄弟たちに敵対していた」とあります（16 章 12 節ではイシュマエルを指して同じことが述べられている）。そのように敵対する人が、死後同じところに行ったと考えるべきでしょうか。信頼できる注解者たち（Waltke、Belcher 等）は、「自分の民に加えられた」とあるだけで、これはアブラハムにとっての自分の民とは別だと述べています。一方で慰めは、後の日の救いについて預言するイザヤ書 42 章 11 節や 60 章 6～7 節にイシュマエルの子孫のリストにあるネバヨテとかケダルの名が出て来ることです。さらには前回見たケトラの子孫のミディアンやエファ、シェバの名前も出て来ます。つまりやがて彼らの子孫にも主の救いの御手は広げられることを預言したものと考えられます。新約の時代には全世界のどんな人も主の名を呼んで救われるという日が来る。その時にこれらの子孫もまた神の恵みにあずかる者たちとされるということが後の預言書で語られます。それは大いなる慰めです。

さて 19 節以降は神の約束を担うイサクの歴史です。まず言われているのはイサクの妻リベカは不妊の女だったことです。そのためイサクとリベカの間には長い間、子が与えられませんでした。結婚は 40 歳でしたが、子が与えられたのは 26 節から 60 歳だったことが分かります。つまり 20 年間も待ったのです。これは先に見たイシュマエルと対照的です。あちらはどんどん子が与えられました。12 人も与えられました。そういう意味で祝福されています。しかしイサクの方にはなかなか与えられない。聖書を見て行くと神の民はしばしばこのような状態に置かれます。アブラハムの妻サラもそうでした。どちらかと言えば困難な状況に置かれることが多い。これは神が私たちの外側よりも内側のことに多くの関心を持っているからであると言えます。単に物事がうまく運ぶよりも、色々な試練を通して私たち自身が成長することを神は心にか

けておられるのです。ローマ人への手紙 5 章 3～4 節：「苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す」。神はそのような状況にあえて置くことによって私たちに訓練し、聖めて、真の祝福へ導こうとしておられるのです。

この状況でイサクはどうしたのでしょうか。彼はアブラハムのような人間的方法には走りませんでした。彼がしたことは祈りでした。21 節に「イサクは、自分の妻のために主に祈った」とあります。何人かの学者は、この言葉の意味は「妻の前で祈った」とか「妻に向かって祈った」というものだとして述べています。とすると陰で一人で祈ったというよりは、妻の前で、妻とともに、妻のために祈ったということになるのでしょうか。それを何と 20 年間も彼は続けました。そうしてついに彼の祈りは聞かれました。私たちも困難の中でこのようにする者でありたいと思います。イサクを見習い、神は祈りへと私を招いておられるのだと受け止めて、そのように取り組む者でありたいと思います。

しかしでした。待ちに待った子が与えられたと思いきや、また大変な状況が起こって来ました。彼女の胎には複数の子が宿ったようで、その子たちが胎の中でぶつかり合うようになりました。それがあまりにも激しくてリベカは「こんなことでは、いったいどうなるのでしょうか」と心配しました。そこで主の御心を尋ね求めると、このような主の答えがあったと 23 節にあります。「すると主は彼女に言われた。『二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。』」そして出産の時、確かに二人が出て来ました。先に出て来た子は赤くて全身毛衣のようでした。その子はエサウと名づけられました。一方、後から出て来た弟は兄エサウのかかとを、その小さな手でつかんでいました。それで彼の名はヤコブと名づけられました。これは今後見るエピソードと関係します。それをすでに象徴的に表すものだったことが以後を読む中で私たちは知ることとなります。

さて今日の箇所を中心は 23 節の主の言葉であると思います。主はそこで「兄が弟に仕える」と言われました。これはどういう意味でしょうか。ある人はこれを弟の方がこの世では成功し、その結果、兄は弟に仕えるという意味に取るかもしれませんが。しかしこれはもっと深い霊的な意味を持った主の言葉です。参考になるのはパウロが

この箇所を取り上げて論じているローマ人への手紙9章10～12節です。6節を見ると分かりますように、パウロのポイントはイスラエルから出た者がみなイスラエルではないということです。そしてまず7～9節でイシュマエルとイサクが取り上げられています。どちらもアブラハムの子です。しかしイサクはまことの神の民である一方、イシュマエルはそうでないと言われています。それに続いて10～12節でエサウとヤコブの話がなされています。イシュマエルとイサクは父は同じですが母は違いました。しかしエサウとヤコブは父も母も同じです。しかしその内の一人は神の契約を担う者として救いにあずかり、もう一人はそうではないという実例がここにあるとパウロは語ります。弟ヤコブは神の契約を担い、救いにあずかるという意味でよりまさる者となり、兄エサウはそうではないという意味でより低い立場を取る。このような意味で兄は弟に仕える、弟がまさると言われています。ですからこれは重大なことです。単にこの世における成功といったレベルをはるかに超えて、永遠の運命に関わることが問題になっていることが分かります。

果たしてこのような神の御心はいつ決められたのでしょうか。今日の箇所から分かること、そしてパウロがローマ書で強調していることは、エサウとヤコブが生まれる前からということです。もし生まれた後にこのことが決められたなら、神はそれぞれの生活ぶりを見て、それに基づいて決めたと見られる可能性があります。そこでそうではないことを明らかにするために神はあえてエサウとヤコブの誕生前にリベカにこのことを示したのです。これはこの神の決定、いわゆる神の選びが人間の行いに基づくものでないことをはっきりさせるためです。もし人間の行いに基づかせるなら（後でも少し触れますが）私たちは誰一人として救われないこととなります。私たちは誰も神の前に良しと認められる状態に達することはできないからです。そんな私たちがもし救われるとすれば、それはただ神の一方的な恵みによる以外にないというのが聖書の主張です。そのことをはっきりさせるために神はエサウとヤコブの誕生前に、つまり彼らがまだ何の善も悪を行っていない内にこのことを示したのです。

そしてさらにこのことをはっきりさせるため、神は弟の方が兄にまさるとされました。神はここであえて当時の（いや、今もそうかもしれませんが）一般的な人間の考えをひっくり返されたのです。救いはただ神の恵みによると言っても、もし神が弟ではなく兄を選んだらどうなるでしょう。きっと兄は高ぶることになると思います。私は兄だから当然だ。そして弟に向かって、あなたは弟なんだから我慢してねという顔

をする。社会もこれを自然の理として受け入れるでしょう。しかし神はそれをひっくり返すようなことを言われるので、私たちの心はかき回されるのです。なぜ弟の方がまさるのかと。とんでもないことではないかと。聖書にはこのように兄が退けられ、弟が祝福される話は多くあります。私は長男ですので、昔はこういう聖書の話が嫌でした。自分が退けられている気がして読んでいて心地良くはありませんでした。しかしこれは自動的にいつも兄がダメで、弟が神に良しとされるという意味ではありません。これは大事なメッセージを私たちに語っています。それは人間的なものに頼って神に救いを求めることはできないということです。社会的にまさった立場にあるから、神の前でも上に見られているのではない。いくら自分は兄貴だと威張っても、実際は他の兄弟より時間的に少し早く生まれただけです。それで自分の方が価値があり、他の兄弟より優先して神は私を祝福しなければならないと神に要求することはできません。むしろ神の前で自分はあわれな者です。他の人との比較はナンセンス。そんな余裕などない者です。人間の間で良いと見られる行いをして、神の前でそれは傷だらけ、しみだらけ。イザヤ書 64 章 6 節によれば、私たちの義は不潔な衣のようなものです。神の前に臭い匂いを放つようなものでしかありません。そんな私たちにとっての唯一の望みは神の恵みです。ですから生まれた順番とか、家柄とか、社会的地位とか、頼りにならない善い行いといった誤った土台に立つのではなく、ただ恵みによって救ってくださる神に目を上げ、この方にこそより頼むように！と聖書は私たちに語っているのです。

今日はここまでですが、神の恵みはこの後、二人の生き方に違いとなって現れて行きます。次回見ますが兄エサウはせっかく自分が持っていた神の祝福に関わる特権を軽んじます。そんなものはいらないと行って投げ捨ててしまいます。これは神がそうさせたわけではありません。エサウは自分の意志でそれをし、その道を進む人になります。一方のヤコブは神の恵みにより頼む者となります。彼は人間的には欠けの多い人であり、決して立派な人ではありません。しかしその彼が最終的に恵みの神により頼む人となります。信仰の光が輝きます。そこに神の恵みは現れて行きます。

このことは私たちにどう当てはまるのでしょうか。ただ恵みによって私たちを救う神はアブラハム、イサクに約束した契約に従って、ついにこのクリスマスの時、救い主イエス様を送ってくださいました。どんなに罪深い人でも、このイエス様を通して、特にその十字架のみわざを通して、神は救いの恵みに生かしてくださいます。そして

聖書が言っていることは選びの恵みをいただいた人は必ずこのイエス様のもとへ行って信じる者となるということです。ですから私たちが今日イエス様を信じる信仰の道歩んでいるなら、それは神の選びによるということです。私の信仰は単なる私の人間的決心から始まったのではなく、私が生まれる前からの永遠の神の選びに基づいているのです。エペソ人への手紙 1 章 4 節：「すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。」 私たちはこのことを受け止めて感謝したいと思います。そして私の内に救いのわざを始めてくださった神は最後の救いに至るまで私を導いてくださいます。私たちがそのことに感謝し、勇気づけられて一層神の恵みにより頼み、キリストに従う救いの道を進む者でありたいと思います。

まだキリストを信じていない方々についてはどうでしょうか。信仰告白に至ってなくても、この礼拝に集まっている方なら、その方は神の大いなる恵みの下にあると考えられます。ヨハネの福音書 6 章 44 節：「わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。」 ですから今こうしてキリストを礼拝する場にあるということ自体、神の大きな導きの下にあることを暗示しています。その導きに感謝して益々神が招いているキリストにより頼む恵みの道へと進めば良い。

ここには集っていない方々についてはどうでしょうか。私たちは自分の家族や友人を思い浮かべるかもしれませんが、その方々については現時点で結論を下すことはできません。最後まで分かりません。ですから私たちは福音を伝えるわざに励まなくてはならないのです。神に選ばれた人は必ずキリストを信じます。そしてキリストを信じるためには、どうしても御言葉に触れることが必要です。ローマ人への手紙 10 章 14 節：「聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。」 ですから私たちは福音を伝えます。そして神の導きが現れるのを待つのです。

一方的な恵みによって救ってくださる神は約束に従ってついにキリストを遣わしてくださいました。どんなに罪深く欠けだらけの者であっても、この方を救い主として受け入れ、より頼むことによって、神の救いにあずかる者とされます。この恵みによる救いを感謝し、キリストにより頼み、神の救いにあずかる者たちとされたいと思います。そしてすべてはただ神の恵みによることを覚えて、すべての栄光を神に帰し、

この方を私たちの何よりの喜びとする神の民の幸いな歩みへ導かれたいと思います。